

〈他者〉とのかかわる力を育てるための「読むこと」の学び

筑波大学附属駒場中・高等学校 国語科

有木 大輔・澤田 英輔・杉村千亜希
関口 隆一・千野 浩一・東城 徳幸
平田 知之

〈他者〉とかかわる力を育てるための「読むこと」の学び

筑波大学附属駒場中・高等学校 国語科

有木 大輔・澤田 英輔・杉村千亜希
関口 隆一・千野 浩一・東城 徳幸
平田 知之

要約

本プロジェクトでは、「〈他者〉とかかわる力育てるための読むことの学び」として、どのような指導が可能であるかを検討した。ここでいう「他者」とは、同級生などの仲間という意味だけでなく、学習者にとって未知の概念やものの見方なども含めている。中一から高二までの実践を通して、学習者の発達段階に応じた指導を試みた結果、他者とかかわりを意識した指導は、「伝え合い」「分かり合う」学びだけでなく、総合的な教科指導に結びつくことを確認した。

キーワード：読むこと 書くこと 伝え合い 調べ読み 学習指導要領

1 テーマ設定の理由・基本方針

1.1 テーマ設定の理由

『国語科教育学研究の成果と展望Ⅱ』（全国大学国語教育学会編 2013）には、近年の国語科教育の関心として、次のように概観されている。「読むこと」を通し、テキストや自己を含めた他者との関わりを学び、それらの思考を再認識し、それらがどのような社会的背景を持つのかを考えさせる学習に重点を置く。関連して、塚田泰彦氏は、読むことは文意を理解することに制限されるのではなく、包括的な思考活動に支えられた表現行為であると主張する（『月刊国語教育研究』446号、2009）。

今年度の『月刊国語教育研究』では、「豊かな言語生活を育む」（3月号特集）「人間関係力を育む国語教育」（5月号特集）など、関連する特集が組まれている。両者でいうところの「他者」とは、他人という意味だけでなく、学習者にとって未知の概念やものの見方などを意味する。

本校のような、中高一貫の男子校かつ入学試験によってある程度均質化された学力の学習者の集団は、人間関係においても考え方においても固定化されがちである。ともすれば閉鎖的になりがちな現状を鑑み、他者と自己との適切な関係性を築く力を涵養すべく、授業を考えていくことにした。

1.2 基本方針

「読むこと」には、幅広い読みの活動を視野に入れている。ひとりで読むのか、皆と読むのか。「皆」は、同級生なのか、別の人なのか。また、教室で読むのか、図書室で読むのかという場所の問題も関わってくる。何よりも、何を読むのかという教材によって「読むこと」の学びは、多様に考えられる。

その中で、国語科における学習指導として、どのような実践が出来るかを考えた。このことは、当然ながら対象とする生徒の学年に応じ、段階を追ってなされるべきである。

以下、実践報告を見つつ考えていきたい。

2 実践報告

2.1 各実践の概要

今年度、本校国語科教員が行った主な実践概要は次の通りである。

学年（教員名）	実践テーマ
実践内容の概要	
中学	
中1国語（東城）	他者とかかわりによって読書の主体をつくる
自律的読者の育成を目標とし、ここ数年継続して中学生への読書指導を行っている。本年度は中学校1年生を対象	

象とした。実践の柱は二つあり、一つは読書記録とその分析、もう一つはブックトークである。

前者の読書記録は「自分の読書環境を把握すること」を目的としている。読書環境とは、自らの読書行為を取り巻く内外の諸条件の総体である。この目的に即し、生徒には読んだ本についての書誌や感想だけでなく、読んだきっかけ・入手の手段・読書の時間と場所なども記録させている。ある程度の蓄積があったところでこれに分析を加えさせ、「自分はどのような読み手なのか、どのような読書の場に置かれているのか」を考えさせている。分析結果は他の生徒と共有させ、各自の読書スタイルの相対化や改善点の発見につなげていく。これら一連の学習活動を終えた生徒には、自らの力で読書環境を把握し、変化させる主体となることを期待している。

後者のブックトークは、あらかじめテーマを設けて本を集め、複数の人を対象にそれらを口頭で順序よく紹介するものである。図書館司書によって館の利用者相手になされるのが通例だが、近年は国語教育にも取り入れられており、本校でも澤田教諭・加藤司書による先行実践がある。他の生徒へのブックトークをゴールに据え、それに向けて知識をどう関連づけ、どうプレゼンテーションしていくかをこれまで生徒各自に考えさせてきた。読書記録の蓄積を表現行為につなげるよい機会となっている。また、本年度の試みとして、昨年度他学年で行われたブックトークの記録動画を活用した。ブックトークに対する具体的なイメージや目指すモデルをもたせる他、あらかじめ注目点を定めさせ動画を分析させることで、プレゼンテーションについて、自他を評価する観点の形成と構想力・技術力の向上を促している。

主要参考文献：

塚田泰彦『読む技術』創元社、2014

杉本直美『読書生活デザインカ』東洋館出版社、2010

笹倉剛ほか『学校 DE ブックトーク』北大路書房、2007

中2国語（関口）	他者とかがかわることで生まれる新しい読み
----------	----------------------

教室で生徒が読解を学ぶ際、読解の目標を持った教師によって生徒の読みを高めていくことは大切だが、それとは別に、今年度は教室の集団性を生かして生徒同士でかわりながら読みを深めていく方向を目指した実践を行った。中学2年生を対象とし、小グループによる考察と発表活動を伴う形で、1学期は説明的文章、2学期は小説と詩を題材にした。いずれも対象となる文章の読解のポイント、あるいは読み解きにくい点について個々の生

徒が考察し、それに基づいてグループ内での討論を行い、その結果をレジュメを用いたりして口頭発表し、聞き手である他の生徒の評価を受けるという形式である。

各生徒が自分自身の関心を元に読解に必要な考察を深めていく形は、生徒の意欲を高め持続させるために役に立つ。また、対象となる文章、作品に取り組む過程には、文章そのものの持つ他者性とともに、読者としての生徒同士の違い、またそこでの説得／受容（納得）活動が存在するので、単純な正解探しに終わらない読解活動ができたものと思われる。

中3国語（杉村）	『平家物語』の参考書を作る * 稿末資料参照
----------	---------------------------

【学習活動】

- ①本や文章などから必要な情報を集めるための方法を身に付け、目的に応じて必要な情報を読み取る。
- ②集めた材料を分類するなどして整理するとともに、段落の役割を考えて文章を構成する。
- ③書いた文章を互いに読み合い、題材のとらえ方や材料の用い方、根拠の明確さなどについて意見を述べたり、自分の表現の参考にしたりする。
- ④決められたテーマについて報告や紹介をしたり、それらを聞いて質問や助言をしたりする。

【授業内容】

- ①1クラスを4名×10班に分け、1班―「成立」・2班―「作者」など『平家物語』に関するテーマをそれぞれ与える。
- ②班ごとに調査を行い、1ページ分の文章にまとめる。図書室の書籍や校内のパソコンでインターネット検索を利用する。
- ③全クラスの班の原稿を集め、目次・表紙をつけて冊子状の『参考書』にし、配布。1学年3クラスで、班ごとのテーマは同じなので、一つの題に関するまとめ文が3本ずつ並ぶことになる。
- ④クラスメイトの前で、班ごとに調査結果を口頭発表。聴衆は、リアクションペーパーを書き、互いに共有する。

グループ学習・調べ学習の授業だが、眼目のひとつは、同じテーマに基づく3本のまとめ文を並べて収録することであった。出来上がった『参考書』には、「1班 成立（A組の文）（B組の文）（C組の文）」というように並ぶ。同じテーマでも記述が同じになるとは限らない。資料を読み、まとめた結果が、自分たちと同じ部分もあれば、異なる説に典拠する部分もあることを知る経験が大切である

と考えた。そして、書籍やHPIによって、様々な理解の仕方があることを知ったうえで、それぞれの情報を吟味することも含め、〈他者〉との関わりを学ぶ授業を目指した。

なお、この授業では学年のサイトを活用し、原稿提出や編集作業をオンラインで行った。その結果、生徒たちは放課後の図書室やパソコン室、自宅のパソコンなどでも作業を行うことができ、教員への提出もスムーズに行うことができた。

和歌の学習のひとつとして、和歌表現の持つ意味の広がりを生徒に感じさせたいと思い計画した授業だった。はじめは、ホトギス歌の分析を個人作業として考えていたが、「大変すぎる」「皆で分担したい」という生徒の声で班活動にすることにした。三人で一班を作り、2～3首ずつ分析をさせた。後の分析結果の共有では、意見の合致に喜んだり、クラスメイトの鋭い読みに歓声が上がったり、〈皆で学ぶ〉メリットを得ることが出来た。(今年度本校教育研究会公開授業より)

高校

高2 (有木)	江戸期の唐詩注釈を読む
江戸時代の唐詩の注釈書を読んで、唐詩を鑑賞する。現在の注釈書とは異なる意見を比較し、どちらが妥当か吟味する。こうすることで、鎖国中の江戸時代に日本人が中国(唐)のことをどのように認識していたかが解る。また、江戸時代の表現方法も味わうことが出来る。千年前の古典を三百年前のフィルターを通して見ることで、古典のかかわりかたも違ってくると仮定した授業を行った。今の研究では、明らかに誤りであったり、二通りの説があるものを提示して生徒に感想を書いてもらおうと、必ずしも今の説を支持するわけではなく、豊かな考えが窺えた。	

高2 (杉村)	皆で探す和歌の世界—『古今集』夏部から—
<p>【学習活動】</p> <p>①和歌を読み、語句の意味・修辞を理解する。(内容を的確にとらえることに関する指導事項)</p> <p>②和歌の読解を通して表現の特色を理解し、その魅力を知る。</p> <p>③まとまった分量の和歌を読み、歌語の持つ意味の広がりを感じ、話し合う。(読み比べたことについて説明する言語活動)(古典を読み味わい、作品の価値について考察することに関する指導事項)</p> <p>【授業内容】</p> <p>①『古今集』一五二番歌を読解する。</p> <p>②『古今集』夏部のすべての和歌を載せたプリントを配布し、ホトギスの詠まれた歌 28 首を 14 班で分担して分析する。</p> <p>③『古今集』夏歌のホトギスが持つ歌語としての意味に気づき、他者と共有する。</p> <p>④③をふまえて一五二番歌を読み、解釈を深める。</p>	

2.2 考察

2.2.1 中学校の実践から

中学の授業では、特に自己の読みと他者の読みを意識することに重点を置き、学年が上がるにつれ、どのような指導が可能であるかを模索した。

中一の授業は、読書記録によって自分の読み方を自覚し、他の生徒の読書習慣を知ること、自らを相対化する活動を行っている。さらに、その次の段階として他者を念頭において話す活動をブックトークが担っている。読書という個人的な活動を目に見える形にすることで、他者と自然なコミュニケーションが生まれるような教室づくりを行った。

中二の授業では、共通の教材を用い、自他の読みを意識しつつ考察する活動を行った。同じ文章を読んでも、自分と他人とは受け取り方が異なることがあるということを実体験させるところに狙いがある。さらに、生徒同士の意見交換により読みの妥当性を考えていく活動は、中一の活動を発展させた形を意識している。

中三の授業では、上記の学習活動をつなげる形で考えた。ここでいう他者とは、他の生徒であり、それぞれの資料の筆者である。生徒が班員と協力しながら、調査・編集作業を通して多様な情報を吟味し取捨選択していく活動を行った。さらに、調べたことを文章化し、口頭発表することで、伝え合い・分かり合う活動を企図した。

2.2.2 高等学校の実践から

高校の授業では、同学年・同じクラスの生徒とのかかわりあいに加え、古典作品の成立当時の表現や後世の受容などの文学史的な視座を導入した実践を試みた。

有木による漢文の授業は、江戸期における唐詩の受容を題材にした。この場合、〈他者〉は江戸時代の唐詩の享受者であり、その先に窺える唐詩の表現である。

過去の人々が、どのように古典を読んでいたのかを学ぶことは、生徒に現代人の読み方を相対化するきっかけを与える。教員やテキストからもたらされる〈正しい読み〉を受動的に与えられるのではなく、主体的に読む活動を行う機会を作り出した。

この試みも、〈他者〉とかかわる力を育てる学びの一つといえるだろう。

杉村の和歌の授業は、皆で読み解き、一定の理解を得る活動が他者とかかわる力を育てる一策になるのではないかという仮説のもとに実施された。

ひとまとまりの和歌をクラス全員で分析し、発見したことを集約することで、和歌の表現の特徴を探る活動を目指した。仲間の読み方を知ることは、生徒の興味・関心を高めることにつながる。他者とかかわることを通して、自分たちの力で学び取ったことは、学習内容の理解・定着を深めるためにも有効であることを示している。他者とかかわる力の育成を意識した指導は、教科の学習の質をも高めるものになりえることが実感された。

2.2.3 まとめ

「〈他者〉とかかわる力を育てるための「読むこと」の学び」について、今年度の実践をみてきた。中高ともに、学年に応じた指導を試みた。その授業でも、自分の読み・考えと他者の読み・考えを相対的にとらえることで、自他の関係性を意識させることに重点が置かれている。そのうえで、聞く人を意識して自分の考えを伝えることや、様々な考えに触れて、それらを吟味すること、皆の考えをまとめ、より良い読みを作り出すことなど、国語科の学習として幅広い展開が可能であることが見出された。

また、これらの取り組みで不可欠となったのは、「書くこと」や「話すこと」で自分の考えを表出することであった。読書記録や口頭発表など何らかの方法で考えを形にし、互いに伝え合う活動そのものが他者とかかわる力の育成に大きく貢献することを再確認した。

67期による67期のための

『平家物語』参考書



3年 組 番 氏名 _____

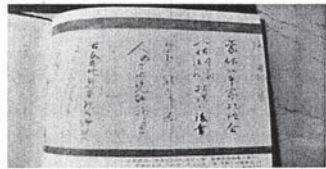
目次 *すべてABC組の順になっています。

- 1班 成立 いつ?どうやって?どんなかたちに?
- 2班 作者 判明している?誰?作者ではないかと考えられている人は?
- 3班 諸本 諸本とは?主な系統やその特徴など
- 4班 平曲 いつ?どうやって?どんなかたちに?
- 5班 琵琶法師 いつ?どうやって?どんな人?現在もいる?
- 6班 全体のあらすじ どんな話?面白いところは?どんな文体で書かれている?
- 7班 主な地名・戦場・史跡 『平家物語』に出てくるもの・関連する伝承など
- 8班 主な武器・馬具・装束・小道具 『平家物語』に出てくるもの・関連するもの
- 9班 源頼経 『平家物語』での描かれ方を中心に史実をふまえても。比較をしても。
- 10班 那須与一 『平家物語』での描かれ方を中心に史実をふまえても。比較をしても。

(1)班	テーマ【甲家物語の成立】	成立
班長:		班員:

私達は、平家物語が、「いつ」「だれによって」「なぜ」作られたのか、そして、なぜ口承という形で(琵琶法師によって)広められたのか、ということについて調べました。

いつ作られたのか: 詳しいことはわかっていない。『徒然草』によると13世紀初期、後鳥羽院政の頃という。また、本文中の内容に承久の乱が含まれていることから、書かれたのは1221年以降であることもわかる。さらに、『菅原延命抄』の紙背に見えられた醍醐寺前課蔵による『平家物語合八帖』の記述(大体1259年頃か)により、この頃には作られていたと考えられる。



右の資料が課蔵の書状。資料の2、3行目に「平家物語合八帖」と書いてあるのが読める。

(写真は『平家物語』教野和夫・小川 国夫著 より)

誰によって作られたのか: 徒然草より信濃前司行長という説がメジャー。詳しくは2班<作者>へどうぞ。

なぜ作られたのか: 当時あった怨霊信仰(菅原道長のたり、など)のもとに、急激な没落(清盛没後たった5年も経たずに平家滅亡!)を経験した平家の追憶のためと考えられる。例えば、「耳なし芳一」という挿話の中でも、芳一に平家物語を語らせて自らを慰めている平家(の亡霊)が描かれている。

なぜ口承なのか: 漢字平の紙さを踏まえ、広く大衆にも「平家物語」を開いてほしい(平家の追憶に参加してほしい)とした作者の配慮があった。

また、「平家物語」を語り聴衆を行うことは(耳なし芳一のように)怨霊に取り憑かれる危険があり、よって怨霊に「魅入られる」ことの無い=盲目である琵琶法師が語り手として選ばれたのだとか。

ちとちと、「物語」として語るために多少の脚色(一門の総大目である宗盛を(実際とは関係なく)忠純に描くことで宗盛が敗者に転落したあとの苦悶性を打ち出した、など)がされていたということもあり、作者が大衆の反応を計算していたことがうかがえる。

参考資料

- ・www.asahi-net.or.jp/~ed6t-hmc/story.htm
- ・www6.plala.or.jp/HEIKE-RAISAN/zenshoudan/kaisetsu.html
- ・ウィキペディア 『連続の日本史4』小学館 井沢元彦
- ・『平家伝説』中公新書 松本伍一 『平家物語下、新潮日本古典集成』新潮社
- ・『平家物語』新潮古典文学アルバム 教野和夫 小川国夫
- ・『井沢式「日本史入門」講座4「怨霊追憶の日本史」の巻』徳間書店 井沢元彦
- ・『学校では教えてくれない日本史の枝葉』PHP文庫 井沢元彦

(1)班	テーマ【	成立	】
班長:		班員:	

「平家物語」は、平家の30年間の繁栄と滅亡を表した軍記物語である。作者・成立年ともに不明だが、源平の動乱後の動きや、「徒然草」などの他の書籍から推測することができ、踏説ある。

まず、徒然草には次のように示されている。

「後鳥羽院の御時、信濃前司 行長 稽古の習ありけるが、(中略)學問をすてて遺世したりけるを、慈順和尚、一藝ある者をば下部までも召しおきて、不便にせさせ給ひければ、この信濃入道を扶持し給ひけり。この行長入道、平家物語を作りて、生傳(しょうぶつ)といひける盲目に教へて語らせけり。(中略)武士の事・弓馬のわざは、生傳、東國のものにて、武士に聞ひきて書かせけり。かの生傳がうまれつきの聲を、今の琵琶法師は學びたるなり。」(徒然草 226段より抜粋)

ここからわかることは、

- ・平家物語は後鳥羽院の治世(1183~1221頃)に成立したこと
- ・作者は著名な学者で前司の行長であるということ
- ・行長は出家した後、慈順和尚の庇護を受け、そこで生伝という盲目の人に出会い、生伝の意見もいれながら作品を作りこれを生伝に語らせた ということである。

ただ、「醍醐神抄」や「尊卑分限」という書物には作者に藤原時長をあげていて、また合巻の事については源光行に依頼したことや、12巻本は藤原資経が書いたなどと記してある。さらには時代が進むにつれて6巻、12巻、20巻、48巻と増えていく過程で加筆者や編集者がいたとも考えられる。これらの分化は琵琶法師の語りによって生み出されたとも考えられる。語り手の能動的な表現によって、多様な表現と分化が生まれたのである。南北朝時代には一方流と八坂流という語りの異なった流派ができ、語り手の本と読み手の本の相互的な加筆・修正を通して、6巻の延慶本(鎌倉時代に成立)、12巻の八代本、発一本(南北朝時代に成立)、20巻の長門本(民間伝承もいれる)、48巻の源平盛衰記などたくさん異本が生まれている。

つまり、平家物語は後鳥羽院、すなわち鎌倉時代初期に原型が行長によってつくられた。その後琵琶法師による語りによって様々な分化をし、複数の編集者によって時代の流れと共に絶えず流動した。そして平家の繁華盛衰と源氏の進撃を描くという一つの作品でありながら、それを越えた文学の形として成り立っていると考えられる。

【参考文献】 書籍の場合は、題名・筆者・出版社、サイトの場合は、サイト名・作成者名を列記。

『軍記物語の世界』・永柳安明・朝日新聞社
古典の辞典

1班 【平家物語の成立】
班長： 班員：

平家物語、といえは平家物語をはじめとする平家の栄枯盛衰を著した有名な歴史小説である。またこの物語はもととは、琵琶法師と呼ばれる盲目の語り部によって広められたということもよく知られているが、その成立に関してははっきりとはわかっておらずまだ謎が多いようだ。そこでこの1班は、この謎多き平家物語の成立を解説していくとともに、自分たちなりの考察を加えていこうと思う。

まず最初に平家物語の成立を簡単に解説していこう。この物語は、初期は3巻ないし6巻の構成であったとされる。ちなみに、当時は保元物語や平治物語などとも四部の合戦状とよばれており、名前も平家物語でなかった。(当時は治承1年から始まった合戦を題材にした物語ということで治承物語とよばれていた)そこから、13世紀中頃に現存のものと同じ12巻の形に整えられたと考えられている。成立した年代は、定かではないが少なくとも兵部記述などから1240年よりは前に成立していたのだろう。ちなみに、平家滅亡は1185年であるからその50年後くらいには、原作が固まったことになる。とはいえこれは治承物語の成立であり、平家物語と関係がないと仮定してしまうと1309年以前の成立としか絞り切れない。

ここまで調べてきたが、この中にはいくつか謎がある。その中でも気になるのは、どうしてこの謎が琵琶法師による語りで広まったのかということだ。原作と考えられている3巻本は現存していないことから、さらに謎は深まっていく。ここに関して、後半では仮説を考えてみようと思う。

まず、語りで広まったというのはただの文化で深い意味はないのだとしてしまっておしまいだ。しかし、ここで考えられるのは書物では広げられない理由があったのだという見方だ。では、なぜ書物では広げられなかったのだろうか。書物では一般大衆には伝わらないだろうから、一般大衆に伝えるために語りという形式をとったのかもしれない。しかし、これがあつたとしたら仕掛人は源氏側のはずだがそれならもって辛い内容になるのが当然だろう。では、逆に書物で伝えるのは問題があったのかもしれない。この場合、書物には源氏や天皇家にとって不都合なことが書かれておりそれを源氏らがもみ消そうとした。それができないように、証拠を隠さずに済む方法である語りをを用いたのではないかと考えられる。

とすると、この不都合なことは何だったのだろうか。平家物語の形式は時代別に並べられた福年体と呼ばれるもので、それを最後まで書くということは、安徳天皇の死と三種の神器の一つである草薙の剣の紛失も当然書くこととなるだろう。するとこれは源氏の天皇殺しという汚名につながるし、天皇家にしても三種の神器という即位には不可欠なアイテムが欠けてしまったという恥になるだろう。これは、検閲には十分な不安要素となる。それを回避するために語りで広められたと考えられよう。先ほどの作品は四部の合戦状といふもの一つと書いたが、前述の理由ならこの作品のみ語りで広まったといったものも納得だろう。

ここまで、ちょっと大それた仮説を考えてみた。とはいえ、別に強い根拠もあるわけではないし推察のみだけなので、あくまでこんな面白い仮説が立てられるくらい平家物語の成立というのは謎が多く興味深いものだと思えてもらえればそれで十分である。某教師のせいであつた私たちに十分な時間も分量も与えられなかったため、魅力を十分に伝えられなかったことは悔やまれるところだが、この解説を通じて、平家物語という歴史小説の中身だけでなく成立にも興味を持ってもらったら幸いだ。

(参考サイト) 朝日ネット「平家物語の世界」 ウィキペディア「平家物語」 平家物語成立の謎
(参考文献) 平家物語を読む(川合 康 作、吉川弘文館) 国史大辞典 (芳川国分館)

2班 テーマ【作者】
班長： 班員：

平家物語の作者について、古くから数多くの説がありますが、一番古い説として、吉田兼好の『徒然草』に、『信濃前司長(しなんおのぜんじゆきな)なる人物が平家物語の作者であり、生仏(しょうぶつ)という盲目の音楽家に教えて語らせた』と記されています。また、生仏なる人物が東国出身であったために、武士や職の話を生仏自身が武士に直接尋ねて記録したとする説や、生仏と後世の琵琶法師との関連を述べたなど、記述は実に詳細です。信濃前司長という人物は、九条兼実という公卿に仕えていた家司、中山中納言頼時の子にあたる、下野守・藤原行長ではないかと推定されています。

『標準分限』『龍編補抄』『平家物語補欠巻』では、兼実時長が作者だとしています。時長もやはり頼時の孫にあたります。

他の説では親鸞の高弟で生仏という法然門下の僧とするものがあります。この生仏と言う人物、平家物語にも登場する人物で、信濃国の名族、越野氏の流れをくむ高野小太郎兼親の息子、兼長(通広)とされており、院師所で勸学院文章博士になった後に出家します。物語の中では大坊名という名の木曾義仲の郡市として登場します。

また源光行は鎌倉幕府の信任が厚く、源氏物語研究や歌人としてですが、もとは後鳥羽上皇の北面を勤めていた武門の出で、承久の乱の際に京方として参加し、乱後に生僧として関東に遷行されたという経緯があります。光行の娘は「美濃局」と称し、建礼門院に仕えていた女房であり、叔父兼長は建礼門院の御所に居たところから、兼実時長同様、平家一門の憎恨に通じていた。ゆえに『平家物語』の作者とも言われています。なお、光行と兼実時長の合作説もあります。

さらに日記「吉記(きき)」の作者である権大納言藤原経房は、後妻に平維盛の未亡人を迎えていた。藤原経房は経房の孫であり、のちに貴子になったという事情があり、「龍編補抄(だいござしゅう)」や「龍集(じゃくだんしゅう)」などの文獻からも、資経こそ『平家物語』の作者の一人であるという説は有力です。他にも『臥雲日侍録(がうんにつけんろく)』には、菅原為長が12巻本の平家物語を書き、生仏(生仏)に伝わったとする琵琶法師・最一の説を載せています。

『平家物語文録(へいけかもんろく)』には、信西入道(藤原通憲)の子女たち、即ち高野家相入道俊徳、俊徳の妹の善恵比呂尼、桜町中納言成龍、仁和寺の蓮種法印たちが『前平家物語』とも言うべき物語を執筆したと伝承を載せてあります。

このように、平家物語の作者には数多くの説がありますが、どれも確証があるものではありません。吉来から多くの説があります。

(参考文獻) 書籍の場合は、題名・筆者・出版社、サイトの場合は、サイト名・作成者名を列記。
日本歴史巡り(<http://www.jpistoryrd.com/kana/heiike.html>)
「平家物語」成立の過程(<http://www.asahi-net.or.jp/~ed6t-hmc/story.htm>)

(2)班 テーマ【作者】
班長： 班員：

『平家物語』の作者およびは定かではないが、様々な説がある。主な説は以下の通りである。

- ・信濃前司長…吉田兼好が著した『徒然草』には前の信濃守の行長という人が出家して天台座主慈円の援助により平家の物語をつくり、それを盲目の琵琶法師・生仏に語らせたことである。その源生仏は「東国のもの」だったので、弓馬のことは生仏が武士に取材して書いたと言われている。
- ・兼実時長…鎌倉前期の文学者。時長の叔母は平時盛夫人であり、安徳天皇の乳母でもあった平頼時(むねとき)で、従兄弟に下野守中山行長を持つ。龍編寺僧院でつくられた筆録である『龍編補抄』(室町時代初期の成立と推定)には、兼実時長が源光行の協力により二十四巻本の『平家物語』をつつたといわれている。また、中山行長は信濃前司長と同一人物であるという説もある。
- ・源光行…源氏物語研究や歌人として知られる学者。光行の娘は「美濃局」と称し、建礼門院に仕えていた女房であり、叔父兼長は建礼門院の御所に居たところから、兼実時長同様、平家一門の憎恨に通じていた。『龍編補抄』には兼実時長と協力して二十四巻本の『平家物語』をつつたといわれている。
- ・藤原経房…日記「吉記(きき)」の作者である権大納言藤原経房は、後妻に平維盛の未亡人を迎えていたが、藤原経房は経房の孫であり、のちに貴子になった。兼実時長や源光行がつつた二十四巻本の『平家物語』とは別に十二巻本『平家物語』をつつたといわれている。
- ・菅原為長…『臥雲日侍録』には、菅原為長が12巻本の平家物語を書き、生仏(生仏)に伝わったとする琵琶法師・最一の説を載せている。為長は土御門・順徳・後醍醐・四条・後醍醐天皇の5代にわたり侍従として仕えた文章博士。
- ・信西入道の子女たち…『平家物語文録』には、信西入道(藤原通憲)の子女たち、即ち高野家相入道俊徳、俊徳の妹の善恵比呂尼、桜町中納言成龍、仁和寺の蓮種法印たちが『前平家物語』とも言うべき物語を執筆したという伝承を載せている。

このなかでも信濃前司長だとい説が有力である。それはその根拠である『徒然草』が重んじられたからだ。これは『徒然草』が平家物語成立について語った文獻中、成立年次が明らかなのとしては最古で、これを記述した兼好法師が基礎について深い関心と良識をもっているからだ。

(参考文獻) 書籍の場合は、題名・筆者・出版社、サイトの場合は、サイト名・作成者名を列記。
<http://www.asahi-net.or.jp/~ed6t-hmc/story.htm> 「平家物語」成立の過程
<http://www.6plala.or.jp/HEIKE-RAISAN/zenshoukan/kaisetsu.html> 平家物語解説
「平家物語」の作者像について 著者：機口晋作

C 2班 テーマ【作者】
班長：

●●作者不明なのか、それとも特定不明なのか?
作者も不明な点については、最も有力とされている「藤原経房説」も、「龍編補抄」の成立から「龍集」の成立まで100年近くの年月が経っていることから、その内容を決定するものではないとされている。

●●作者がもし生仏とされている人選

●●信濃前司長=藤原行長?

九条兼実(公卿)に仕えていたとされる源氏、中山中納言頼時の孫(行長)とも記されている。吉田兼好(『徒然草』第226段)において、「源氏物語も兼実時長に傳し、生仏の口で語り傳へ、兼実時長に傳し、生仏の口で語り傳へ」と述べられている。この説は有力だが、先述のとおり資料の根拠が明確に記されていない。

●●藤原経房

鎌倉前期の文学者。父は安徳天皇の乳母を勤めていたが、平家一門の憎恨を通じたといわれている。『龍編補抄』『平家物語補欠巻』において、兼実時長が作者であることを記しているように記されている。

●●源光行

源氏物語研究や歌人として知られる学者。平家一門の憎恨に通じていた。『龍編補抄』との合作説も存在する。

●●菅原為長

『臥雲日侍録』に作者が記されているという説がある。

●●信西入道

『平家物語文録』に作者が記されているという説がある。

●●信西入道の子女たち(藤原通憲)の子女たちが『前平家物語』を執筆したとい説が『平家物語文録』に存在する。

(参考文獻) 『徒然草』 藤原経房のSEO
「平家物語ってなんだ?」<http://www.asahi-net.or.jp/~ed6t-hmc/story.htm>
「方丈記 龍集」 藤原 亨 岩波書店
「平家物語」 中 佐藤 亮一 新潮社

3班 テーマ【諸本～諸本とは？主な系統やその特徴など～】
 班長： 班員：

「諸本」に関して複数の辞書では次のように出てくる。大辞林 第2版では「同一の作品で本文の性質や内容の異なる諸種の写本や刊本の総称。」日本国語大辞典 精選版では「さまざまな本。特に、いったん成立した書物が、その後作者自身あるいは享受者その他による改変や誤写などによって、部分的に異同を有する数種の伝本を生じたときそれらを総称していう。」広辞苑 第5版では「①もろもろの書物」「②原点批判の対象としての、ある文献の稿本・写本・版本などの総称。」と出ている。これらのことから、多くの辞書ではいわゆる昔の物語を伝承していく際に発生する書き間違いなどと言われる。

「平家物語」の伝本と言えれば現存するもの7、80種と数えられる。その諸本問題に果敢に立ち向かう専門家は数少ないものの、その整理作業は困難となっている。

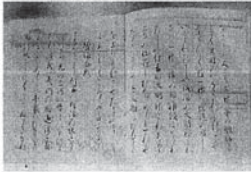
略本

語り物系

一方流系統(道頭巻型 寛一本・京子十行本・流布本等)は南北朝頃に名人明石寛一が出て、台本を定めて以降承えて続いた。だが、八坂流系統(断絶平家型 歴代本・百二十句本・平松家本・竹柏園本・鎌倉本・中院本・國民文庫本・奥村家本等)の方はそのような才筆家が出なかったため、別個整理出来ないほどに広がった。



異本
 南都本・源平闘諍録・四部合戦状本 のように数々の異本も生み出されている。
 略本の逆である広本としては延慶本・長門本・源平盛衰記があげられる。



特徴

『平家物語』には、数多くの諸本が存在する。そして、大きく分けて「読み本系」と「語り本系」の2つがある。また当時は、本は手で書き写していたため、諸本(=異本)が発生していた。それゆえに、諸本の数は70~80種類とも言われている。

どうしても、現在おもに使われている平家物語は寛一本である。古典の教科書に載っていたり、本屋で売られていたりする平家物語のほとんどがそうである。

寛一というのは、明石寛一という南北朝時代の琵琶法師のことである。なぜ寛一本が主であるのかというと、当時寛一が、自分の死後に、口で語り継がれている平家物語についての論争になると考え、平家物語の定本を作ったからだ。

4班 テーマ【平曲ふぁっふぁっふぁ】
 班長： 班員：

平曲

伴奏として琵琶を弾きながら「平家物語」の詞章を語り聞かせる語り物音楽。「平家琵琶」ともいい、最近では、音楽種別名称としては「平曲」、楽器種別名称としては「平家琵琶」ということが多い。

起源

「徒然草」の記事によれば、鎌倉時代の初期に信濃前司長が世を捨てて比叡山の慈円の保護を受けた頃に關東出家の盲人生仏と協力してまとめ上げたという。行長には種彦、慈円には天台声明、生仏には盲僧琵琶の素養があったと思われる。その三種の音楽が平曲の源流をなしている。その後、有力者の保護を受けたりして15世紀にかけて黄金時代を迎えたが、次第に衰退していき、明治以降は伝承者がごく少数となった。

『平家物語』の各章が平曲の一曲にあたり、全体は200曲からなる。これは、初期の平曲の内容から次第に増補されて増えていったものである。現状では減縮寸断ではあるが、語句や浄瑠璃などに与えた影響は大きく、音楽史上の意義は大きい。

【参考文献】 書籍の場合は、題名・著者・出版社、サイトの場合は、サイト名・作成者名を列記。

(3) 班 テーマ【諸本(ショボヘン)】
 班長： 班員：

- (1) 諸本とは
 同一の作品で、改変や誤記などによって異なる箇所のある、写本・刊本の総称。複数の人が同時多発的に伝えたため、他の古典物語よりも多く60種類以上の諸本が生まれたといわれています。
- (2) 諸本の分類
 平家物語の諸本はたくさんありますが、分類することができます。諸本の分類を始めたのは、山田孝雄教授で大きく分けて2つに分類されました。それが語り本系と読み本系で、この2つには大きな違いがあります。語り本系が十二巻ではほぼ固定しているのに対して、読み本系は六巻、二十巻、四十八巻など巻数は様々で、本文の量は多くの場合、語り本系の倍近い分量があります。現在平家物語のもっとも有名な諸本として広く知られているのは語り本系の寛一本というものです。
- (3) 語り本系
 代表的なものは4つほどある
 - ・寛一本 数ある平家物語諸本の中で、現在、もっとも一般的に読まれているのが寛一本で、他の諸本に比べ構成に無駄がなく、文芸的到達度が最も高いといわれています。
 - ・流布本 昭和初期に至るまで『平家物語』といえば流布本を指したと言われるほど広まっていた。その数は二十種類以上に及びます。
 - ・歴代本 語り本系最古級の写本。
 - ・百二十句本 歴代本と同系統の諸本で、「断絶平家」型十二巻の各巻を十句(十家)に分けるためこの名で呼ばれています。
- (4) 読み本系
 代表的なものは4つ
 - ・延慶本 諸本中最古の読み本系テキスト。平家物語成立時の古態を伝えるといわれ、近年研究者の間でも注目を集めるテキストです。
 - ・源平盛衰記 金44段48巻に及び、諸本中最も大部の読み本系の一異本。
 - ・源平闘諍録 鎌倉時代末期から南北朝時代初期に関東地方で成立した読み本系平家物語の一異本。税金ながら欠本が多い。
 - ・四部合戦状本 原資料を生のまま取り込んでいる部分が多いことから史実性が高く、反面話話的要素は多くありません。語り本系に近い。

【参考文献】 書籍の場合は、題名・著者・出版社、サイトの場合は、サイト名・作成者名を列記。

平家物語諸本紹介 <http://www6.plala.or.jp/HEIKE/RAISAN/zenshoudan/shohon.html>

(4) 班 テーマ【平曲】
 班長： 班員：

平曲について

I 平曲とは

平曲(へいきょく)は、語り物の音楽の一ジャンルもしくは一演奏様式。盲目の琵琶法師が琵琶をかき鳴らしながら語った『平家物語』のメロディおよびその演奏様式で、物語琵琶のひとつ。近世以降に成立した薩摩琵琶や筑前琵琶でも『平家物語』に取材した曲が多数作曲されているが、音楽的にはまったく別のもので、これらを平曲とは呼ばない。平家物語を語る歌謡。そしてメロディーのことを平曲という。

II 平曲の歴史

まず、平家物語の成立の歴史についてみてみたいと思う。平家物語の成立については、徒然草第二百二十六段の記しているところが、最も早く、かつ詳しいものとして知られている。

「後鳥羽院の御時、信濃前司長、雅古の誓ありけるが、康府の御論議の誓にめされて、七徳の舞をふたつ忘れたりければ、五徳の冠を異名をつきにけるを、心うき事にして、学問をすてゝ遊世したりけるを、慈観和尚、一盃あるをせば、下部までもめしきて、不便にせさせ給ければ、此信濃入道を扶持し給けり。此行長入道、平家物語を作りて、生仏といひける盲目に教てからせけり。さて、山門の事をことと申しかけり。九郎判官の事ははくはく知て書せたり。盲僧の事はよくしらざりけるにや、おほくのこともをしるしらせり。武士の事、弓馬の業は、生仏、東國のものにて、武士に聞てかゝせけり。生仏が生れつきの声を、今の琵琶法師は学びたる也。」この記述によれば、平家物語の原型が成立したのは、承久年間、平家が播磨/瀬で滅びた寿永四年(1185)から、ほぼ30年たった頃、源平の戦の記憶がまだ覚めやらぬ時期である。

さて、このように平家物語の成立は徒然草に詳しいわけであるが、その平家物語を琵琶に乗せて語り、庶民に広く伝える役割を担ったのが琵琶法師である。Iでも述べたが、近世以降平家物語を参考にした曲が多数作曲されている。

III 言語学としての平曲

中世の日本語というのは、今の私たちが用いる言語とは異なり、アクセントが異なっていた。琵琶法師が語る平曲は、当時のアクセントを正確に反映していることから、言語学上の価値が非常に高いといえる。

【参考文献】 平家物語(上、中、下)
 平家物語 牧野和夫、小川国夫
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B9%83%E6%98%B2>

(4) 班 テーマ【 平 曲 】
班長： 班員：

1. そもそも平曲とは
鎌倉時代中期から後期にかけて、琵琶法師と呼ばれる目の見えぬ僧によって平家物語は琵琶を弾きながら語られた。この「平家物語」というのは徳川期以降に庶民の娯楽物として定着した後に定着した名であり、当時は単に「平家」と呼ばれていた。つまり、平家を歌って語ったものが「平曲」というのである。

2. 歴史と曲の種類
作者については諸説あるが、一説には13世紀初期、雅楽・声明・盲僧琵琶の三者を源流として成立。また『徒然草』には信濃前司行長と生仏という盲僧の協力で鎌倉時代の初めころつくられたとあるが、その成立をめぐっては多くの異説がある。約100年後の南北朝時代になると、後醍醐天皇という名人が現れて詞曲・曲節に改良を加え、現行のような形に整えたとされる。これら室町時代が平曲の最盛期。江戸時代も幕府の保護により三味線の流行にも促進され、とくに徳川家光は平曲を愛好して故多野流と前田流を開かせた。両流を学んだ伏見知一は『平家正統』という平曲をつくり、今日まで前田流の規範である。明治に入ると当道保護の政策が廃止され、彼多野流は藩村性弾の死により事実上断絶。一方、前田流は平曲に熱心であった津軽藩にも伝わり、藤土館山道之は1910年、『平家音楽史』を著した。1955年に国の選択無形文化財に選択され保護の対象となっている。

色々な平家物語が伝わっているが、平曲は『平家物語』の各章を一曲として数え、全200曲余。秘事は「小秘事」の二曲と「大秘事」の三曲。これは総検校にのみ伝授され、一生に三度しか演奏しないほどの秘曲として尊重された。当初は三巻であった巻数もだんだんと増え、現在は全十二巻に増補巻が加わった「寛一本」が最も有名。異本には、全二十巻の「長門本」、全四十八巻の「源平盛衰記」などが知られている。「紙面精舎の巻」の序、諸行無常の響きあり。妙蓮双樹の花の色、盛者必衰の理を求す」という冒頭の文章で分かるように、仏教の「無常」という考えが主題になっている。

3. 曲の構成

平曲の1章は、曲節とよばれる定型の部分の組合せでつくられている。曲節は約50種、主要なもの11種ほど、それぞれ音階・音程・リズムが異なり、合歌挿入では「捨」の曲節というように詞章の内容などとも関連がある。その詞章や曲節は、平曲以前の能、浄瑠璃、地歌等曲などに多大な影響を与えた。

平曲に用いる平家琵琶は、雅楽の素琵琶よりやや小さく、四弦五柱。柱と柱の間を押さえて演奏する。撥はツグ製が多く、先の両端はとがっている。琵琶は曲節の前奏や間奏を奏し、詞章とともに弾かれず、琵琶のフシは「口説」の前では「口説」のように続く曲節によって決定されている。

4. 参考文献

- 平家琵琶ホームページ <http://homepage3.nifty.com/heikebiwa/ara/>
- 平曲と平家物語 (鈴木孝憲著、知泉書館)
- 平曲と平家語り (平家物語の成立と琵琶法師たち) <http://japanese.hix03.com/Narrative/heike/heike01.html>
- 日本大百科全書 (小学館)
- 源平騒鳥合戦 <http://www.e-yashima.lipoyshitune/yoshitsune/heike.htm>

13

(5) 班 テーマ【琵琶法師 いつ?どうやって?どんな人】
班長： 班員：

琵琶法師とは、平安時代から見られた、琵琶を街中で弾く盲目の僧である。琵琶を弾くことを職業とした盲目の僧の一人で、平安時代中期におこり、語った盲僧たちは比叡山ゆかりの琵琶法師たちであった。琵琶法師に使われる琵琶は素琵琶とよばれる比較的単純な琵琶と雅楽に用いられる伝統的な素琵琶それらを折衷させたものだったらしい。盲僧琵琶は仏教儀式に用いられたもので、琵琶法師の弾き語りには、中国から平安時代以前にきた声楽の琵琶(盲僧琵琶、宗教音楽)に当たる。宗教音楽としての盲僧琵琶を担った。なお、盲人の琵琶法師(盲僧琵琶)から宗教性を脱した語りものを「くずれ」という。

平家物語の弾き語り語りは鎌倉時代に起こった。また、このとき、主として経文を唱える盲僧琵琶と、『平家物語』を語る平家琵琶とに分かれた。『平家物語』の語り本は、当道僧に属する盲目の琵琶法師によって琵琶を弾きながら語られた。これを「平曲」と呼び、物語琵琶の一つである。

平曲は、音楽的には、盲僧琵琶の一つで、声明のなかの語り部分である「講式」の大きな影響を受けて鎌倉時代中期に成立し、素琵琶を採用している。また、これは平曲が生れたのは、透説とされている『徒然草』の二六段に書かれているものによれば、12世紀の末頃鎌倉時代に藤原信濃前司行長という公卿の作った物語を、天台宗の仏教歌謡の曲調によって生仏という東国生まれの盲僧が語った事によって始められたとされている。琵琶法師の中には、乞食同然の者もいて、語り物を語って諸国を漂泊し、素琵琶とよばれる比較的単純な琵琶を使っていたと考えられているが、盲僧という官職を授けられて、詩歌管弦をこととする者もいたのである。生仏はもやもや官官であったと思われる。

盲僧が琵琶を弾くようになるのは、任明天皇の子人麩親王が盲目となり、ほかの盲僧にも琵琶を教えるようになって以来といわれている。鎌倉時代初期には、そのような琵琶法師が多数存在していた。生仏もそのような琵琶法師の一人だったと思われる。これは後述のすべての語り物の元祖であることに歴史的価値をもち、室町時代に足利尊氏の庇護を受けて全盛期を迎え、江戸時代には三味線音楽に誘えられたが、幕府の保護で命脈を保った。

そもそも「平家物語」という古典文学作品は、元来琵琶という楽器を伴って語られる語り物の音楽の詞章であった。平家物語という名称自体、徳川時代以降に定着したものであり、当初は単に平家と呼び、その語り本を平曲ともいっていたのである。そして、平曲を語る者を平家語りというようになったのであった。

語り物としての「平家物語」を『平家琵琶』といい、略して平家とも言われ、現在では、ふつうには「平曲」といわれる。

【参考文献】 書籍の場合は、題名・著者・出版社、サイトの場合は、サイト名・作成者名を列記。

15

(5) 班 テーマ【琵琶法師】
班長： 班員：



琵琶を伴って叙事詩を語った盲目の法師の芸術者。7世紀ころに中国より伝来した琵琶は元来の合奏に用いられる一方盲僧と結んで経文や語り物の伴奏楽器とされた。今昔物語集には、琵琶に優れた平家物語の皇子教実親王の彩色御丸が盲目となって大坂山に住んだが、そのもとに源博朝が三年間通って秘曲を伝授される話を載せる。御丸は琵琶法師の祖とされ、醍醐寺第四の皇子という伝承を生むが一方彼らの自治組織とでもいふべき当道で任明天皇第四皇子人麩親王を祖神とし天夜尊として祭る。散逸した小右記には、寛和元年琵琶法師を召して、才藝を尽くし占めたことが記されていたといひ、新編源記にも琵琶法師物語とあるから、平安時代に叙事詩を語って、活躍したことは確かである。鎌倉時代に原記物語が生まれると彼らは平家物語を代表として語り、その内容をより豊かにした。(日本史大辞典)

琵琶を弾く法度の盲人。平安中期、京の町で琵琶を伴って、物語する姿が藤原明衡の新編源記に描かれるが、盲人か否かは不明。饞喰、唱導の語り土台に鎌倉前期には、壮大な平家物語の手になる。以来、平家琵琶を代表する語り物や、小唄、民謡なども唄え、京楽、明石、八坂、坂東を拠点に広く諸国を往來した。南北朝時代に明石一丸が興行権確保のため、統一的自治組織当道座を設立、御丸に代わって、天夜尊を祖神とした。本所の庇護のもと、室町時代が平家琵琶の最盛期となる。この浄瑠璃へ領域を広げ、琵琶を三味線、事に受えて、近世芸能者へと転じた。(日本歴史大辞典)

琵琶を弾く法師。平安時代から巻頭の盲僧で琵琶を弾くものがあった。鎌倉時代、平家物語を琵琶に合わせて語り始め、大成して平曲となった。なお九州の盲僧琵琶は古い盲僧の流れで、琵琶を弾いて地神話を語り、余興に物語を歌って歩く。(広辞苑)

平安時代から、存在した、放浪芸人一種。中世以後は、経文説話を表奏とする盲僧と、専ら平曲を演奏するもの、二系統に分かれた。主に後者をさす。(大辞林)

日本の琵琶は、古代のアジア大陸よりもたらされたものであるが、その系統には、中国から奈良時代および平安時代にもたらされた楽器の琵琶(雅楽、素琵琶)と、それと同時代ないしそれ以前にもたらされた声楽の琵琶(盲僧琵琶、宗教音楽)との2つがある。琵琶法師は、後者に属し、宗教音楽としての盲僧琵琶を担った。なお、盲人の琵琶法師(盲僧琵琶)から宗教性を脱した語りものを「くずれ」という。

14

(5) 班 テーマ【琵琶法師】
班長： 班員：

琵琶法師(びわほうし)は平安時代から見られた、琵琶を街中で弾く盲目の僧である。琵琶を弾くことを職業とした盲目の僧の一人で、平安時代中期におこった

日本の琵琶は、古代のアジア大陸よりもたらされたものであるが、その系統には、中国から奈良時代および平安時代にもたらされた楽器の琵琶(雅楽、素琵琶)と、それと同時代ないしそれ以前にもたらされた声楽の琵琶(盲僧琵琶、宗教音楽)との2つがある。琵琶法師は、後者に属し、宗教音楽としての盲僧琵琶を担った。なお、盲人の琵琶法師(盲僧琵琶)から宗教性を脱した語りものを「くずれ」という。

鎌倉時代には『平家物語』を琵琶の伴奏に合わせて語る平曲が完成した。この時代には、主として経文を唱える盲僧琵琶と、『平家物語』を語る平家琵琶とに分かれた。琵琶法師のなかには「浄瑠璃二段子草子」など説話・説経節を取り入れる者があり、これがのちの浄瑠璃となった

もっとも有名な「琵琶法師」といえば、小泉八雲の種族で知られる「耳なし芳一」。平家の悲劇に夜な夜な呼び出されて幕中で「平家物語」を語り、置かれて逃げるために体じゅうに経文を書きつけて身を隠したものの、唯一経文を書き忘れた耳を奪われてしまった芳一。この物語は、単に有名な物語といっただけでなく、平安時代からごく最近までの日本列島に実在した琵琶法師たちのありようを良く象徴するものだ。

書者によれば、「物語」のじまは「モノ語り」、すなわち死者の霊(モノ)の声を聴きとり、その声を代弁して語ることだった。琵琶を演奏して歌う曲師であると同時に、祈禱によって霊や祟りを鎮める民間の宗教師であった琵琶法師たちは、そのほとんどが盲目で、「耳」を媒介に世界とつながる人びとでもあった。彼らの耳が聴きとった世界は、まさしく物語の最初のすがたとして、さまざまに語られた。あるときは皇族や将軍の付き人の演奏者として、あるときは露地を放浪する遊説の法師として。

仏教の説話を取り入れたことから、「法師」といわれるようになった。

「琵琶法師は、なぜ盲目なのか。」

もともと盲目は生きていくことが難しい世の中で、琵琶法師という特殊技能を持った人々が登場したのが起源と思われる。つまり、もともと盲目だった人が琵琶法師となった。

いくさの部分は「唄い」という曲節を主眼として語る。これは声をあまり引かず一音ごとに区切って一つ一つ唄いあげるように語る方法である。テンポが速く強い調子で鳴るので勇壮な感じが強いので、とくに合戦の前や寄せ、突撃の待機やその奮戦ぶりを語る場合などに多く用いられる。

「平家琵琶」は800年続く日本の伝統芸能として現在も継承されているが、継承者不足に悩んでいる。現在は盲目は限らない。

参考文献

- 平家物語 下 岩波書店 梶原正昭 山下宏明 校注
<http://okwawa.jp/ga/4738328.html>
- 琵琶法師(異界)を知る人々 兵衛裕己 岩波新書

16

6班 テーマ【全体のあらすじ】
班長： 班員：

一 はじめに

平家物語といえば、冒頭の「祇園精舎の鐘の聲……」は有名である。しかしながら、その全体のあらすじについては一般に知られていないのではないだろうか。
そこで私たちは、この「登場人物」「起承転結」「時代背景」の3つの視点から平家物語の全体のあらすじについてまとめた。このレポートが皆さんの平家物語の理解の一助となれば幸いである。

二 主要登場人物

1. 平清盛

平忠盛の子。保元の乱、平治の乱などで活躍し、従一位太政大臣にまで至る。しかし次第に周囲からの反感が高まり、諸国の源氏が蜂起する中で熱病死する。

2. 源頼朝

源義朝の息子。次第に勢力を広げ、木曾義仲、平氏を滅ぼし、征夷大将軍に任じられた。鎌倉幕府の基礎を築いた。

3. 源義経

源頼朝の息子。富士川の合戦、木曾義仲との合戦や平氏追討の一助、犀川、壇浦の合戦にことごとく勝利する。頼朝との不和から反旗を翻すが、没落して吉野から奥州に逃れる。

三 起承転結

前半部(巻1~6)では、平家一門の興隆と栄華、それに反発する反平家勢力の策謀などが描かれる。平家は、清盛の世になって大きな権力をみせるが、権勢を掌理した清盛はやがて悪行の限りを尽くすようになる。そうした平家のふるまいは人々の反感を招き、その反感がやがて平家打倒の陰謀として結集されていく。そして、源頼朝、木曾義仲が率い、その陰謀とした情勢のなかで清盛が死んでしまう。

後半部(巻7~12)は、源氏勢の進取と源平合戦、そして平家の滅亡が主に描かれている。まず壇浦で決戦をあげた木曾義仲が都に向かって快速軍を開始し、これにより平家は都を捨てて西海へ逃れる。しかし、都入りした義仲は、後白河法皇との喧嘩から東国の頼朝の介入を招き、東国勢の侵襲を受けて滅び去る。一方、木曾義仲を撃ち破った東国勢は、一ノ谷に於ける平家の攻め立ちに立ち向かう。ここから源平の対戦となり、一ノ谷、犀川と敗北を重ねた平家は長門の壇ノ浦に追い詰められ、安徳天皇は頼朝二位に迎かれて入水、一門の大半はここで自決することとなった。

四 時代背景

まず、諸説あるが大抵平家物語の成立は1190年から1218年の約30年程くらいだといわれている。その50年ほど前、都では保元の乱、平治の乱、そして壇ノ浦の戦いという3つの大きな戦いが起こっていた。朝廷間の対立が続き、源氏と平氏も巻き込んで発生した保元・平治の乱にともなう勝利した平氏は経済力・軍事力を増大させ、清盛は武士で初めて公家になる。こうして華やかな平氏政権が始まる。しかし「平家であらざるべからず」と言うようになり高ぶった平氏は多くの者に憎まれ部落ちするのである。その後どんどん追い詰められ、壇ノ浦で源氏に滅ぼされてしまうのである。おごり高ぶった平氏が落ちていく姿を鮮明に記したものがこの平家物語なのである。

【参考文献】

古今伝説(1997)『平家物語』岩波書店。
源氏物語(2007)『日本の古典(上)』11 平家物語 トク社。

17

(7)班 テーマ【鹿ヶ谷事件について】

班長： 班員：

この事件を調べた動機

平家物語では、この鹿ヶ谷事件は平家打倒の動きの最初のもので位置付けられて非常に重要だと考えられる。また、清盛に捕まったそれぞれの人たちの行動がそれぞれ異なりユニークで面白いから。

事件の概要

鹿ヶ谷事件とは後白河法皇の近臣が平氏打倒を企てた陰謀事件である。1177年、後白河法皇の近臣である、藤原成親、西光、俊寛が中心となって京都東山、鹿ヶ谷にある俊寛の山荘で謀議を企てたことが始まりで、後に多田行綱の密告により清盛の知るところとなり関係者は捕えられ処分された。

平家物語における鹿ヶ谷事件のエピソード

- ・俊寛の山荘で、鹿ヶ谷事件の関係者たちが集まって宴会をしたとき、藤原成親がふと立ち上がったときに胸に刺さっていた短刀(徳利のこと、「へいじ」と読む)を倒してしまった時、平氏と短刀をかけて「平氏が倒れた」と言って喜んだ。
- ・西光が清盛に捕えられた時、清盛が「自分が低いのに後白河法皇が引き立ててくれたおかげで出世できたというのに、平家に対して謀反を企てるとはどういうことだ」と言って責めると西光が「お前の出世こそ身分不相応だ」と言い返し、怒った清盛に惨殺された。
- ・事件の首謀者ともいえる藤原成親は平家盛と縁戚関係にあったので、平治の乱のときは清盛と敵対して敗れたが重盛のおかげで命を助けられた。鹿ヶ谷事件でも重盛の助命嘆願によっていったんは備前国への流罪になったが、結局配流先で非業の死を遂げた。導の入った酒を飲まされたか、それを拒否したために崖の上から突いた杭を並べた竹林に突き落とされたとも言われている。
- ・法勝寺という大きな寺の寺務僧をしていて、何百人もの徒者を従えていたくまらしをしていた俊寛は、配流先の鬼界が島で漁民に物乞いをして生きる立場になってしまったことに耐えられなくなり、遂に食を絶って命を終えた。平家物語の語り手はこの俊寛の没落の原因を位の高い僧として他人に事仕せながら僧としての節度を怠ったためだとしている。

まとめ

平家物語ではこの事件を平家没落の予兆として語っていると同時に、斬首された西光や流罪になった俊寛など事件の関係者の没落の原因を現世での悪行の報い、つまり因果応報に求めている。その点において、この事件は平家物語における仏教思想を理解するうえで、重要な役割を持っているといえるだろう。

【参考文献】 書籍の場合は、書名・著者・出版社、サイトの場合は、サイト名・作成者名を列記。

- ・平家物語【一】校注者 梶原正昭・山下宏明 発行所 山口昭男 岩波書店
- ・日本史大辞典 平凡社
- ・戦争の日本史6 源平争乱 上杉和郎 西弘文館
- ・平家物語のあらすじと登場人物(平家物語完全現代語訳) 竹内みちまろ

19

(6)班 テーマ【平家物語全体のあらすじ】

班長： 班員：

平家物語は、天承元年(一一三二)三月、平清盛の父に当たる平忠盛が昇殿を許されたところから始まる。成り上がりを経験とそうとする貴族を忠告はうまくいかなかった。そのうえ息子の清盛も出世街道を突き進めた。その後も、親族を利用して反乱分子の首を掴みながら力を蓄えていった平氏は栄華を誇るようになる。

<調子付く平家>

その栄華に溺れたのか、清盛は、侍らせたいた紙王という白拍子(男装し舞をする遊女のこと)を、別の白拍子である弘に気が移ったせいで追い出してしまうという事件を起こした。しかも弘も無常を感じ紙王とともに後世を祈る姿に身をやつしてしまうのであった。

一方、末世の崩壊が、皇室においても、二条天皇と後白河法皇が親子でありながら憎みあっていた。しかも二条天皇は前代に放逐された皇孫を所望し、強引に内内(内儀に入ること)させてしまった。しかしそんな二条天皇も、病により若くして命を失ってしまい、その次代に御年2歳の六条天皇が即位した。そして二条天皇の葬儀で事件は起こった。葬儀の参列で興福寺の悪僧達が比叡山の葬送に乱入したのである。怒った比叡山の大家達(興福寺の末寺、清水寺を擁した)のであった。

こうして、六条天皇に代わって平家一族を皇后にもつ皇太子、高倉天皇が即位する。とうとう平家は天皇の外戚となったのであった。

<平家の危機に陥る過程>

そんな平家の驕りが事件を引き起こしてしまう。藤原基房に対して清盛の孫資盛が狼藉をはたらき、逆にやり込められてしまったのである。これを聞いた清盛は激怒し基房に対して復讐を仕掛けるが、資盛の息子重盛はこれを知り、息子の資盛に基房に對し謝罪をさせるがそのことは平家の悪行の始めのきっかけとなる。

そうした平家の悪行は多くの反感を呼び、平氏に抵抗するものが現れるようになった。そして源頼朝は、親朝が敗れたあとに伊豆に追放されていたが、バラバラになっていた源氏一門をまとめて、平氏と戦うために京都に攻め上がった。そのような状況の中、清盛が病死してしまう。リーダーを失った平氏は、統制のとれぬまま都を追い出される。その後平氏はいったん九州まで逃げて体制を整え、一ノ谷での決戦に向かう。

<平家の滅亡>

そして起こった一ノ谷の戦い、敗れた平氏は船を求めて逃げた。そんな中、九州の武将である熊谷次郎直実が平清盛の弟である平経盛の子、平教盛(17歳)を斬首し、そのものが身に付けていた笠のつばに首を入れていたことに気が付いた直実が、その気品の高き心を打たれる始末で終わっている。

※参考文献>マンガ日本の古典(上)(中)下巻、著者 梶原正昭、出版社 平文書

18

7班 主な地名・戦場・史跡

班長： 班員：

石積山の戦いで山中に敗走した頼朝は敵の視察現場に見つかるも、景時はこれを見逃した。これにより、のちに景時は頼朝に重用される。土肥のしとの窟がこの逸話にまつる伝説の地として伝わっている。

源氏の武者・熊谷直実が敵を探していると、沖へ逃げている平氏の武者を見つけたので、戻ってくるよう呼びかけた。武者は逃げへ引き返し直実と組むが、直実は強くとも敵わなかった。直実は首を取ろうとするが、その武者は直実の息子と歳が近い少年だった。悔れに思い逃がそうとするが、他の源氏の武者が追いついて逃げられそうになかったため、泣く泣く少年を討ち取った。直実は武者の無情を悔い、後に出家した。

主なゆかりのある場所

・即成院

与市は出陣の途中、京都まで来たとき病にかかったが、即成院に参詣し、阿彌陀如来に平癒を祈願したところ、たちまち回復。

・新藤野神社

後白河法皇が紀州・熊野三山の祭神を勧請して建てた神社。

・法住寺

この辺りは後白河法皇の離宮・法住寺殿があったところ。

法住寺殿は七条通、泉涌寺通、大和大路通、東山山麓に囲まれた広大な地域を占めていたが、木曾義仲の焼き討ちで遭った離宮は焼失。『平家物語巻八』法住寺合戦に詳しい。

・六波羅羅寺

この附近・六波羅は清盛をはじめ平家の主だった人々が邸宅を構えていた

清盛を「六波羅羅」と呼ぶのもこのため。

・清水寺

平安初期に坂上田村麻呂によって創建された清水寺だが、これまで、何度も火災に遭っている。『平家物語巻一』にも清水寺の下のりが記されている。

・清閑寺

小僧は自分の嫡領・高倉の愛を奪った者として清盛の怒りにふれ、清閑寺で出家させられたそう。

高倉上皇の小僧と二度までも引き裂かれ、心労が重なり、「私が死んだら小僧のいる清閑寺に葬ってくれ」と遺言し21歳で亡くなった。小僧は高倉の善徳を引継ぎ、死後は上皇の島に葬られたという。

・平等院

以仁親王が逃げ込んだ場所であり、平等院の合戦が起こる場所であり、矢切りの悪男など何人もの伝説の人がその顔を見た場所である。

・備中の水島

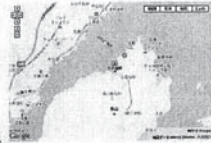
源氏が皇島にわたるために布陣した場所である。しかしこの戦いで源氏は大敗してしまう。

参考文献まるごと京都ポータルサイト e-kyoto <http://www.e-kyoto.net/rekisi/72>

20

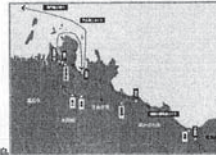
(7) 班 テーマ【主な地名・戦場・史跡『平家物語』に出てくるもの・関連する伝承など】
班長： 班員：

1. 厳島神社



場所：広島湾の中の厳島の北に位置する。
なぜ厳島神社を大切にしているのか：平清盛が、高野山の大塔を修理することになった。修理が終わったのち、大塔をおがみ、奥の院へ行くど、どこからともなく現れた僧に厳島神社も修理してみなさいと、言われた。このお清盛はこの僧を弘法大師と信じ厳島神社の再興に尽力した。

2. 星島



場所：香川県高松市の東北に位置し、瀬戸内の海に突き出た半島
星島の合戦：1184年2月の一の谷の戦いで源義経に大敗した平氏が星島に飯の内裏、安徳天皇、三種の神器を置き京都を奪還しようとする。そこに源義経が軍を率いて星島を襲い、源氏の末平家は敗れさらに西へと後退していくことになる。有名な源頼朝の物語はこのときに生まれた
星島に陣を構えた理由：①讃岐国は平清盛の祖父、正盛が国司をしていたこともあり古くから平家の支配下にある。都を逃れた平家は清盛の家来、田口成貞を頼り、星島に拠点を築いた。
②『平家物語』に星島には城があったとの記述があり、古く日本書紀にも「星嶋城(やしまのき)」が見られる。当時の星島は完全な島であり、天然の要害だった。また、東側は庵治半島との間に大きく入り込んだ入江が広がり、海から攻めてくるであろう源氏を待ち伏せするには絶好の前線基地だったことも一因である。

【参考文献】 書籍の場合は、書名・筆者・出版社、サイトの場合は、サイト名・作成者名を列記。
<http://www.5b.bieboer.co.jp/~michimar/heike/index.html>
歴史と文学の図解 12「四国」
歴史と文学の図解 11「中国」
<http://www.mv-kazawa.jp/course/special/yashima/>

(8) 班 テーマ【 主な武器・馬具・装束 】

班長： 班員：

平家物語では、武器や馬がかなり詳しく描かれている。その理由としては、この作品は文字ではなく音楽で伝えられていた作品であり、それにより立体的なイメージを作りやすかったということがある。また、服装を相手に描くことで、死んだときに遺物に花が散っていくようなイメージを持たせたいという効果もある。源平時代の武士は弓射騎兵と打物歩兵であり、その備する攻撃用の武器は、弓射騎兵が弓箭・太刀・腰刀、打物歩兵が太刀や長刀に腰刀であった。これらの戦闘には、そうした備する武器に応じた戦闘法と流れがある。特に弓射騎兵の戦闘は、騎射戦、太刀による打物戦、腰刀による射撃戦となる。こうした弓射騎兵の戦闘の中心はやはり騎射戦である。飛び道具である弓箭と、衝撃具である打物を比べた場合、やはり飛び道具をまず使用し、ついで衝撃具に移るのが自然の流れであろう。まして弓射騎兵のように、弓箭と太刀を同時に身につけると、太刀などを先に使用することはなかなか難しく、まず弓箭を使用し、ついで太刀などに移行することになる。源平時代の打物といえ太刀と長刀である。太刀は騎兵・歩兵ともに使用し、長刀は主に源平や歩兵が使用する。使用法は、歩兵の場合は、打物を徒歩でしか使用しないのだから分かりやすいが、騎兵の打物使用は馬上と徒歩がある。この点、太刀の馬上使用は源平時代に増加したらしい。『平家物語』(巻九)では今井兼平の最後の戦闘がその一例だが、騎射の後に太刀に移行している。弓射騎兵にとって、太刀が二次的な武器であることを示している。

また、『平家物語』では、馬を射られるなどの理由で落馬してはじめて太刀を放く記述も多い。これを「落馬打物(らくぼうちもの)」とよぶこととする。落馬打物は太刀の徒歩使用を前提とした行為といえる。
一方、長刀の馬上使用は『平家物語』には見えない。長刀の馬上使用は、延慶二年(一三〇九)の目録が付属する『春日権実験記拾遺』に一例みえるのが管見での初見であり、『太平記』で多くみられるようになる。

平安時代の貴族の格好としては平安装束と呼ばれ男性は束帯 女性は十二単をはじめとする非常に機軸性欠けた服である。これはのちの鎌倉時代の服装と比較すると一気に平化しているのがわかる

清盛は出家したときに髪をそったのでそこのヘアは高い格好である よい子は真似してはいけない 悪い子は真似してはいけない 普通の子どもまねしてはいけない



『平家物語拾遺』巻十一 扇的(ふふうふういふういふ)

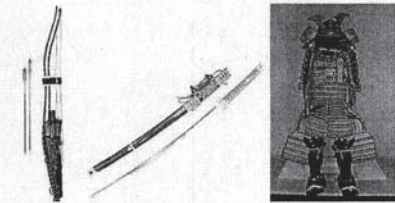
参考文献：神戸市図書館(city.kobe.lg.jp)

A 組 8 班 【主な武器・馬具・装束・小道具】

班長： 班員：

○武器について

平家物語の時代である平安末期では、馬上で戦う武者+それを補佐する歩兵という組を作って戦うものだった。名乗りをあげての一騎打ち、という戦いは実際にはほとんどなかった。なおこの「一騎打ち」のイメージの元ネタとなったのは、一の谷合戦における熊谷次郎直実と平家盛隆による一騎打ちである。馬上の武者は近接戦の武器として太刀と呼ばれる刀を使った。太刀の特徴は後世の刀同様反りが付いていること、そして刃を下にして腰にぶら下げておくことであり、刃を上にして腰帯にさすいむゆる刀とは違う。他には、角帽子、大楯、鎧矢、征矢、弓といったものが標準的な装備であった。



○馬具について

日本の馬具は西洋のものと違った進化を遂げていた。鞍は軍陣鞍と呼ばれるもの、籠は舌長籠と呼ばれるものが使われていた。

鞍には前輪(まえわ)、後輪(しずわ)と両者をつなぐ原木と呼ばれる部品があるが、軍陣鞍は前輪と後輪が高く、肉厚な構造になっている。これは甲冑武者を乗せても安定するようにするための。また、舌長籠は足全体を乗せられる長く扁平な「舌」が特徴で、スリッパのような形をしている。



○参考文献

『平家物語 全巻』水原 一

○参考にした HP

<http://www.marvellouswings.com/Katayuu/Horsetack/Horsetack.html> 日本甲冑騎馬研究会

8 班 テーマ【主な武器・馬具・装束・小道具】

班長 班員

1. 武器

平家物語で描かれている武士は、弓射騎兵と打物歩兵に分けられ、弓射騎兵は弓箭・太刀・腰刀、打物歩兵は太刀、長刀、腰刀などを装備していた。彼らの戦闘には、そうした備する武器に応じた戦闘法と流れがある。特に弓射騎兵の戦闘は、騎射戦、太刀による打物戦、腰刀による射撃戦となる。

馬上の武士は籠(かご)のようなもので武装した。
この時代ではすでに矢に種類があり、主なものは鎧矢(かぶらや)、大将を射るための矢(射手の氏名が書かれている)、通常の矢があった。縄文時代からあった道具であるだが、かなり発達している。

2. 馬具

軍陣鞍
平安時代から鞍は発達し、軍陣鞍が平安時代に出現した。これは、甲冑を付けた武士が乗っている間に安定するように、前輪、後輪が高く、肉厚であるという特徴がある。

籠
「わあみ」と読む。これは、馬に乗っている間に足をかけられる部品であり、この部品自体は古墳時代からあったものだが、この時代は足を深々と入れることができる(外国のものはそうでない)ものなので、それだけしっかりと体重を支え、立ちながら騎乗で戦うことができた。日本伝統の和式馬術の形成と戦争の増加によって発達したと考えられる。

3. 装束

大将が身に着けるような甲冑と、雑兵が身に着けるような防具では、姿形が違っていた。上級武士が身に着けていた籠は、大籠と呼ばれていた。これは、基本的には革と鉄でできていて、重さは約 30 kg あった。しかし、西洋の甲冑とはちがって、体を自由に動かせる作りになっていた。これを着こなすために、この時代の武士は乗馬や弓の訓練の他に、水泳などを行い、体力強化に励んだという。細かい特徴としては、軍陣鞍が左右より前後の方が短い、ということ(馬に乗りやすい)や、弦走り(軍陣鞍であるということ(弓の弦が引っかけからなようにするための)などが挙げられる。雑兵は、これら兜や大楯を除いたような防具を着ていた。

4. 小道具

武器や馬具以外にも合戦で重要な役割を果たした小道具がある。そのひとつが源義朝のどくろ(頭蓋骨)である。これは、源義朝が流罪の身になっていた時、文覚が頼朝の父、義朝のどくろを持って頼朝を訪ね、平氏への罪を洗済させるために使われた。これと一緒に、後白河法皇の院宣も使われた。

その他、皇位を冠していることを示す三種の神器なども重要な小道具であったと言える。

参考文献

<http://home.cstv-yokohama.ne.jp/22/hnasb/koten/heike/heike.umakeiro.html>
http://www.city.kobe.lg.jp/information/institution/institution/document/genpei/busu/bu_sentou.html
<http://www.marvellouswings.com/Katayuu/Horsetack/Horsetack.html>
集英社版 学習漫画 日本の歴史⑦

(10) 班 テーマ【那須与一の平家物語での描かれ方と実像の比較】

班長:

班員:

1. 那須与一とは

鎌倉時代初期の武士。下野国那須の鎌倉御家人。

太郎資高の11男。名、宗高。

源義経に仕えた弓の達人。源平合戦（→治承の内乱）の際、源義経の軍に従い

元暦2（1185）年2月讃岐屋島の戦いで海上に舟を浮かべた平家の軍勢が

小舟の竿に旭日の扇を掲げて飛び出したのを見て、

源義経の命令でこれを射落とした話は有名。

2. 屋島の戦い

1184年に宇治川の戦いによって木曾義仲が源頼朝によって滅ぼされ、平氏は義仲に奪われた領地を回復した。その結果、摂津国福原まで進出したが、一の谷戦いで源頼朝、源義経に攻められて敗北。そして、平氏は本拠を八島に置いた。その後、後白河法皇は兵士方の安徳天皇を廃止、みしゅの神器がないのにもかかわらずその弟の建武親王を即位させたことで、朝廷と平氏との関係は完全に決裂した。このような背景から屋島の戦いは勃発した。

屋島は現在とは異なり、源平の争乱の時代は島であった。また、屋島付近で瀬戸内海の幅が狭まることから、ここが瀬戸内海の制海権を握る上で非常に重要な意味を持っていた。

この戦いは源義経や伊勢三郎義盛らの活躍により、源氏が華々しい勝利を収めている。

3. 屋島の戦いの中の那須与一

激しい争いが繰り広げられた屋島の戦いが、夕刻になり、休戦状態になると、平氏は美女をのせた小舟を出し、竿の先の扇を射、と源氏方を挑発した。そこで、源義経はその役目を畠山重忠に命じたが、辞退。その代わりに与一の兄である那須十郎を推薦する。しかし十郎も傷が癒えないと辞退。半ば強制的に与一が指名された。源平両陣が静寂に包まれる中、与一は的に向かって馬を進めた。波が高く、なかなか狙いが定まらない中、那須野の竜神、正八幡に「南無八幡大菩薩」と祈禱し、名乗りをあげて矢所を尋ねた。平氏は玉虫を出して、蜘蛛の糸の辺りを射よと指示した。与一は見事に矢を当てた。そして、これ

【参考文献】 書籍の場合は、書名・筆者・出版社、サイトの場合は、サイト名・作成者名を列記。

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B1%88%E5%B3%B6%E3%81%AF%E6%B8%A6%E3%81%84>

<http://www.h3.dion.ne.jp/~urutora/heike4.htm>

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%82%A3%E9%A0%88%E4%B8%8E%E4%B8%90>

『源平の争乱』上杉和彦

『源の本』麻原美子

29

(10) 班 テーマ【 那須与一 】

班長:

班員:

那須与一という人は、源氏と平家の「屋島の戦い」にて、平家が立てた扇の的を、見事射落としたことで有名な源氏方の武士である。

- ① 実際の人物像
- ② 平家物語での描かれ方
- ③ まとめ

1. 実際の人物像

那須与一は平安時代末期の武将である。那須氏の2代当主といわれる。幼いころから弓の達人だった。1180年に那須岳で弓の稽古をしていたときに義経に出会い、源氏に貸軍した。屋島の戦いの後に、平氏が掲げた扇の的を射めたことで有名である。

しかし、実在の人物という証拠はない。

2. 平家物語での描かれ方

屋島の合戦では平家を裏切って源氏につく平家も多く、平家の大敵となった。日が暮れるので一時休戦となり、平家は船の上に陣取り、源氏は陸に陣取った。すると平氏は余興として、扇をのせた小舟を一隻出した。源氏はこの扇を射るのだということを理解し、誰が射るかの話になった。ここで、選ばれたのが那須与一である。最初は一回扇を射ることを辞退したことから、比較的謙虚な若者とされていることが分かる。

しかし、辞退したことに対し、判官が怒ったため、重ねて辞退するのはまずいということを感じられるぐらい賢い人物でもあった。

弓の腕前に関しては、一番であるという評価であった。具体的には飛ぶ鳥の三羽中二羽を撃ち落とすほどの腕前だと書かれている。

そして、扇を射るときに神に祈って無事成功させ、皆から喝采を浴びた。しかし、那須与一の弓の腕に感動して船の上で舞を舞っていた平氏の兵がいたが、伊勢三郎義盛の命令でその人を射とめていた。これにより、平家は怒って源氏を煽ると、源氏の三尾屋十郎ら5人が出陣した。悪七兵衛景清と三尾屋十郎との一騎打ちで三尾屋十郎が命からがら逃げ切ったのち、平家はこれに調子づいて源氏を攻撃するが源氏に返り討ちにあって終わった。そのエピソード以降、那須与一に関しての描写はない。

3. まとめ

那須与一は実際に存在したのかは不明だが、平家物語の中では弓の名手とされ、喝采を浴びたすごい武将であるとされた。実際、この出来事後に平氏と源氏の間で大きな戦いが起こり、平氏は敗れ、その後堀ノ木の戦いで滅亡している。このことを考えると、那須与一は源氏に大きく貢献したということもできる。また、平家物語はあくまで物語であるので、武勇伝を伝えるために誇張されている所もある。だから、謎が多い人なのである。

参考文献

<http://www.h3.dion.ne.jp/~urutora/heike4.htm>

30